

内好を上げておきたい。

竹内好は本論中で溝口雄三の「竹内批判」に関連して述べておいたように、日本を映す「鏡」として中国を見る、あるいは日本を「鏡」としてその中に中国を見るといったように、相互に相手を映す「鏡」の役割を担う関係として日中両国をとらえる方法を採用していた。日中両国間の「共同主観性」の「歪み」を認識し、かつこれを克服する方法としては、この研究上の「主体」と「客体」を「鏡」のように等価のものとして位置づけるやり方は、確かに一定の有効性を持っている。しかしそれだけでは日中両国間のみならず、アジアとヨーロッパの間に永く存在してきた「共同主観性」の「歪み」でもある「オリエンタリズム」を根幹から覆す方法とはなりえない。

すでに1989年3月にフランシス・フクヤマが「歴史の終わり？」⁶¹の中で明言したように、冷戦終焉後の国際社会において、欧米近代を支えてきた「自由主義」こそ今や他のすべての政治理念を凌駕し、ヘーゲルの言う「絶対精神」として最後の「自己実現」の歴史過程に入ったとする認識が、今日支配的になってきている。フクヤマはこの最後の歴史過程を「成熟したアナキー」(B・ブザン)あるいは「安定的なレジーム」(クラスナー)に向かうものとして楽観的に予測したが、92年に登場したサムエル・ハンチントンの「文明の衝

突？」⁶²では、むしろ自由主義文明と非自由主義文明との対立を悲観的に描写し、「未熟なアナキー」の混乱に向かう可能性があることを予測した⁶³。

楽観論、悲観論の違いはあれ、フクヤマ、ハンチントンともに、ポスト冷戦世界では「欧米近代」の理念である「自由主義」が、全地球の範囲で「自己実現と自己拡張」を求める段階に入ったことを予測したのである。こうした予測は現在までのところ傾向としては一定程度的中しているといわざるを得ない。米ブッシュ政権が、「自由主義」国家間には過去戦争は生じなかったことを根拠に、「自由主義」の地球規模での普遍的实现を目指すことを明言し、それこそがまた米国と世界の安全保障の基盤となるとして、実際にアフガニスタンやイラクで大規模な軍事行動を採ったからである。

「オリエント(東洋)」と「オクシデント(西洋)」の相互間に生じる「共同主観性」の「歪み」を「オリエンタリズム」として批判したサイードやコーエンの大きな貢献にもかかわらず、今日、過去の歴史にもましていっそう、その「歪み」は強まっていると言わねばならない。

以下、第2部では「竹内好再考」を中心に、この点での方法論のパラダイム転換の出口がどこに見出し得るかを探ることとする。

1 毛里和子『現代中国政治』名古屋大学出版、1993年、の「序章」の書き出しは、「中国はしばしば観察者をうらぎる」の小見出しから出発し、事実認識と未来予測の誤謬がなぜ生じるのかから議論を起している。同様に天児慧『中国——溶変する社会主義大国』東京大学出版会、1992年、も冒頭で、「わが国の中国研究はなぜかくも一貫してその時の中国の“現実”に翻弄され続けてきたのか」と述べ、そこから研究方法論を論じることから始めている。

2 たとえば、船橋洋一『内部』朝日新聞出版社。

3 丸山真男『増補版・現代政治の思想と行動』未来社、1964年。

4 丸山政治学を、「大衆」を仮構のイメージとしてしかとらえ得なかったものとして批判したのは吉本隆明である。「丸山真男論」『吉本隆明全著作集』第12巻、勁草書房、昭和44年。

5 ここで用いられる「世界観」とは、世界認識に際して認識を規定する価値判断の体系あるいはイデオロギーの体系をいう。

6 レヴィ=ストロース著、室淳介訳『悲しき南回帰線』上・下、講談社文庫、1985年。

7 Thomas S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, University of Chicago Press, 1962. 2nd Enlarged Edition, 1970. トー

- マス・クーン著、中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房、1971年。
- 8 渡辺正雄はこのクーンと同様のことを、プトレマイオスの天動説からコペルニクスの地動説への転換に例をとって、「コペルニクスが太陽中心説を提唱したのは、観測の量が増えたとか質が向上したとかということによるものではない」と述べたうえ、バターフィールドの言葉を引用して「コペルニクスは、従来からの同じ観測データを、a new thinking cap（新しい思考の帽子）をかぶって見たからこそ、それを全く別のものとして見ることができた」としている。H・バターフィールド著『近代科学の誕生』講談社学術文庫。
 - 9 プラトン『国家』岩波文庫。プラトンは国家の健全と病いについて、「(国家の)健康は体の各部分が自然の秩序と支配に従っている状態から生じ、病いは物事のありようが自然の秩序に逆らった状態から生み出される」と述べ、その国家論が自然中心主義に基づくことを明言している。
 - 10 聖アウグスティヌスの護教論『神の国』こそ天上のユートピアを地上に実現しようとする最初の試みにほかならなかった。マンフォード著、月森左知訳『ユートピアの思想史的省察』新評論、1997年、93-95頁。
 - 11 高坂正顕「現代の精神的意義」(同著『歴史哲学と政治哲学』弘文堂教養文庫、1939年)はすでに戦前期に後述する近代超克論との関連で、この中世ヨーロッパの自己矛盾を鋭く指摘していた。廣松渉『〈近代の超克〉論』講談社学術文庫、1989年、37-39頁。
 - 12 下村寅太郎「近代の超克の方向」(日本科学史学会編『日本科学技術史体系6 思想』第一法規出版社、1968年)。この叙述も前注記の高坂論文と同様、戦前期の近代超克論との関連で登場したものである。廣松渉、前掲書、42頁。
 - 13 森永晴彦「日本人にも科学ができるのか?」(『自然』1976年1月号)。森永氏は近代自然科学者となる条件を次のように述べている。「自然に親しみ自然の一部になることと、自然科学者になることが決して同じでない……。むしろ自然科学者に必要なのは自然を外から見る精神で、むしろ智に対する主観的情熱ではないかと思われる」。同様の観点は渡部正雄『文化としての近代科学』講談社学術文庫、2000年。
 - 14 中岡哲郎『工場の哲学——組織と人間』平凡社、1971年。
 - 15 富永健一『人類の知的遺産79 現代の社会科学者』講談社、昭和59年、5-14頁。
 - 16 この限りで、その本性上「観察学(ウォッチング)」は、対象を人為的に再構成しようとする近代科学の範疇には入らない。
 - 17 たとえば大塚久雄『社会科学の方法』岩波新書、1966年。高島善哉『社会科学入門』岩波新書、1954年。徳永恂『社会哲学の復権』せりか書房、1968年。最近のものとしては猪口孝『社会科学入門』中央公論社、1985年。
 - 18 Max Weber, "Konfuzianismus und Taoismus" in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, 1 Band, 1920.
この点後段で見るように、ヴェーバー自身、目的論的価値判断の有無のみで「価値自由性」が損なわれるとは見ていなかった。
 - 19 馮友蘭はこうした方法論上の自分の試みを、宋明理学を根拠にこれを発展させたという意味から「新理学」と呼んだ。加々美光行「文化大革命と伝統継承——梁漱溟、馮友蘭、李沢厚」(『現代中国の挫折——文化大革命の省察』アジア経済研究所、1985年)。
 - 20 エドワード・W・サイード著、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年。
 - 21 マックス・ヴェーバー著、富永・立野共訳、折原補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫、1998年。安藤英治「マックス・ウェーバーにおける『客観性』の意味」(同著『マックス・ウェーバー研究』未来社、1964年)および大塚久雄『社会科学の方法』岩波新書、1966年)。原典はMax Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*。以下のヴェーバーにかかわる議論も安藤、大塚の著作に依拠している。
 - 22 マルクス著、エンゲルス編、向坂逸郎訳『資本論(二)』岩波文庫、1969年、9-11頁。
 - 23 たとえば毛里和子、天児慧らが主催して行った「中国の構造変動：1996-99年度の文部省科学研究費補助金の特定領域研究」では、積極的に中国の政策担当研究者との交流を行ったことが手伝って、中国の政治・経済・外交の各面の政策について、日本人研究者としてのオルターナティブ(選択肢)を提出した。毛里和子編『現代中国の構造変動1 大国中国の視座』東京大学出版会、2000年。
 - 24 宮西義雄編『満鉄調査部と尾崎秀実』亜紀書房、1983年、17頁。
 - 25 平野の「転向」の画期をなしたのは、同著『馬城、大井憲太郎傳』(昭和13年)。平野の同著は戦後、内容を大幅改訂して出版された。同著『大井憲太郎』吉川弘文館、1965年。
 - 26 吉本隆明「転向論」『吉本隆明全著作集』第13巻「政治思想評論集」勁草書房、昭和44年、9頁。
 - 27 吉本隆明、前掲書、18-22頁。

-
- 28 平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』河出書房、昭和20年、11頁。
 - 29 中西功『中国革命の嵐の中で』青木書店、1974年。とりわけ216-232頁。
 - 30 一部の例外というのは、80年代に改革開放政策が本格化したのち、経済学者の小宮隆太郎や宮崎義一のような、日本の戦後経済改革の政策立案にかかわった経験を持つ学者たちが、中国政府からその政策経験を買われて改革開放政策に関する諮問をうけるなど顧問的役割を果たした事例があるからである。もっともこのような役割を果たした学者たちが、やはり中国を専門とする研究者ではなかったという点も、ここでは銘記する必要がある。
 - 31 たとえば国際政治学者の猪口孝、五十嵐武士、経済学者の田中直毅、渡辺利夫らの本来、中国専門でない研究者の日本政府内の影響力の強さをここでは指摘しておく。
 - 32 溝口雄三は竹内好の中国論を批判して、竹内には毛沢東の中国に仮託して戦後日本の「近代化」の歩みを批判しようとする姿勢が強かったとしている。竹内自身は中国礼賛派には数え得ないが、竹内同様の姿勢は中国礼賛派研究者の大半に共通して見られた。溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会、1989年。
 - 33 溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会、1989年、3-34頁。
 - 34 竹内好「方法としてのアジア」（武田清子編『思想史の対象と方法』創文社、1961年）、のち『竹内好評論集』第3巻「日本とアジア」筑摩書房、1966年、同ちくま学芸文庫『日本とアジア』1993年に収録。
 - 35 ちくま学芸文庫『日本とアジア』466頁。
 - 36 Edward W. Said, *Orientalism*, Georges Borchardt Inc., New York, 1978. 邦訳、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年。
 - 37 「共同主観」という言葉は、廣松渉がフッサールの現象学から示唆を受けて展開した認識論、存在論をめぐる議論の中で初めて用いられた。なおここでは後段で述べるように、廣松の議論に欠如していた「意志論」を加えた意味で用いている。廣松渉『世界の共同主観的存在構造』勁草書房、1984年。
 - 38 Beauvoir, S (de) *Le Deuxième sexe*, Paris, Gallimard, 1949. 邦訳、生島遼一訳『第二の性(-)』新潮社、1959年、および井上たか子・木村信子・中嶋公子・加藤康子監訳『第二の性（決定版）』（全2巻）新潮社、1997年。
 - 39 I・イリイチ著、玉野井芳郎訳『ジェンダー 女と男の世界』岩波書店、1984年。1990年代に入ってこの「セックスとジェンダー」の概念的区別に対する異議がジュディス・バトラーによって唱えられるようになった。Judith Butler, *Gender Trouble :Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge New York and London, 1990. 同著第1章 *Subjects of Sex/Gender/Desire* を邦訳したものとして、荻野美穂訳「セックス/ジェンダー/欲望の主体」『ジェンダー・トラブル』第1章（『思想』1994年12月号、1995年1月号）がある。バトラーは社会的文化的意味づけを受けない中立的な「性=セックス」の概念は実在しないと主張した。
 - 40 吉本隆明の「^{ついでに}対的幻想」の概念はこの男女間の共同的、「^{ついでに}対的」なるものとして成立する幻想意識を指している。吉本隆明著、芹沢俊介（聞き手）『対的幻想 n個の性をめぐって』春秋社、1985年。むろん吉本の言うように、男女間に成立する「対的幻想」は社会的に成立する差別的意識構造としての「共同幻想」とは異なる独自の性格を有している。たとえば恋愛に結ばれた男女は、「道行きや心中」に見られるように社会的な差別抑圧の関係意識、階級、身分、民族等々の差別抑圧を越えてその幻想を全うしようとする場合がある。とはいえこの男女間の「対的幻想」は、「ジェンダー」を克服し得るものでも、社会的差別抑圧の「共同主観性」を克服し得るものでもない。
 - 41 井上たか子・木村信子・中嶋公子・加藤康子監訳『第二の性（決定版）』（全2巻）新潮社、1997年。
 - 42 加々美光行『逆説としての中国革命』田畑書店、1995年、第三部「“反近代”精神の敗北」を参照。
 - 43 この点に関しては加々美光行『中国——政治・社会』アジア経済研究所、1995年に詳しい。
 - 44 陳東林ほか編、加々美光行監修『中国文化大革命事典』中国書店、1997年は、陳および加々美の前書き部分で文革研究を公開研究として容認しない当時の中国政府の内情について触れている。
 - 45 1978年11月開催の中国共産党第11期第3回中央委員会総会を境に、毛沢東時代に迫害を受け失脚または死亡した幹部たちの名誉回復と復権が行われ、あわせて文革の実相が初歩的に明らかにされたことが、日本の論壇と学界の潮流を大きく変え、一斉に親中国派の学者の研究に批判の砲火が浴びせられるようになった。その嚆矢をなしたのは中嶋嶺雄「『毛沢東批判』と日本の知識人」（『東京新聞』1978年12月8日）、西義之「日本の四人組は何処へ行った」（『諸君』1981年3、4月号）、辻村明「朝日新聞の仮面——『論壇時評』の偏向と欺瞞をつく」（『諸君』1982年2月号）などである。
 - 46 たとえばカリフォルニア大学パークレイ校経済学部の Yingyi Qian 教授は1981年に北京の清華大学数学科を卒業後、コロンビア大学に留学、1990年にハーバード大学で経済学博士学位を取得後、カリフォルニア大学に奉職した。

また儒学研究で知られるハーバード大学の杜維明教授は、1985年に北京大学の招聘を受け同大学哲学系で儒学を講じている。

- 47 た例えば1989年に中国を出国してシカゴ大学、コロラド大学の客員教員となった劉再復、その他、六・四天安門事件後に出国し米国に渡った陳一諮、嚴家其など著名な学者たちを挙げうる。
- 48 た例えば国分良成『日本・アメリカ・中国——強調へのシナリオ』TBSブリタニカ、1997年。
- 49 例外は日中関係を主テーマとする研究などの場合で、日中両政府あるいは日中の友好団体が研究対象となり、かつ資料情報提供者となるケースである。
- 50 日本における医療医学のシステムに対する反省は、1963年のサリドマイド訴訟を発端に、1965年以後医療過誤訴訟件数が増加したのを契機に開始し、1968年の東大医学部の大学改革を求める学生運動の勃発によって、まずインターン制度の廃止されて本格化した。しかし日本において最終的にインフォームド・コンセントが積極導入されるようになったのは、その後20年余を経た1990年、日本医師会生命倫理懇談会の提言に始まる。唄孝一・宇都木伸・平林勝政編『医療過誤判例百選』有斐閣、1989年。
- 51 重要な点はここで言う「検証の手続き」がどのような内容を含むものかということである。研究者は研究対象者による「検証手続き」に晒されるといっても、決して研究者が研究対象者の批判を無条件に受け入れるということの意味するのではない。それはインフォームド・コンセントに際し、医師が患者の同意を取り付ける時、何もかも患者の言いなりになることが良いのでないと同様である。ここでは医学について専門的知識を有しない患者に対して医療の詳細についての情報開示を前提として、明解で十分に納得のできる説明（アカンタビリティ）が求められる。その過程で、医師は患者との医療上の「対話」を繰り返した上で最適の医療方針を固める。その後現実に治療が開始してからも、節目節目ごとに、この「検証手続き」が反復されなくてはならない。臨床の現場で医師が取得する一次的資料情報は、言うまでもなく、患者の身体検査診断から取得される。つまり患者は好むと好まざるとにかかわらず、医療情報の第一次的提供者にほかならない。と同時に、患者は当該医療による利益も弊害もともに受ける可能性を持った直接的な利害関係者である。この点にこそ、患者が医師から「情報開示」と「アカンタビリティ」の「手続き」原則に基づく説明を受ける権利が生じる根拠があるのだ。とは言え医師はこうした「手続き」を通じて、患者に対し自己の見解を全面的に撤回することも、逆に全面的に押し付けることもしないことを原則とする。以上のインフォームド・コンセントの「手続き」の徹底こそが、医療ミスを減少させ、医療医学を臨床を通じて発展させる有力な方法であるとの共通の認識が今日確立してきたのである。もっとも目下、多発する医療ミス事件は、こうした「検証手続き」の重要性が、30年余の歳月を経て徐々に風化し軽んじられつつあることを意味するかもしれない。
- 52 NHK スペシャル「医療・信頼は回復できるのか② 問われる医師の“裁量”」2001年7月7日放送。
- 53 東京大学大学院の地域研究科やアジア経済研究所の地域研究部などは、日本の学界のこうした呼称法を代表するものである。
- 54 John King Fairbank, *Chinabound A Fifty-year Memoir*, Harper & Row, Publishers: New York, 1982.
- 55 平成7年5月1日現在の統計では、来日外国人留学生総数は53,847人。うちアジア地域からの留学生が49,212人で91.5%を占め、なかでも中国人留学生は24,026人で44.6%を占めた。アジアからの留学生の大半が語学留学ではなく、学問留学を目的としている。一方、日本からの海外留学は、平成7年度の総数は165,257人。うち最多は米国留学の82,008人で49.6%を占めた。一方、中国留学は全体の3位で12,947人、7.8%を占めた。米国留学の目的は大半が学問留学、他方中国留学の目的の大半は語学留学に止まる。『我が国の留学生制度の概要——受入れ及び派遣』文部省学術国際局留学生課、平成8年度。
- 56 た例えば1984年から天津南開大学で行われた富永健一東大教授（当時）の経済社会学とりわけ社会発展論に関する講義は、すべて通訳なし日本語で行われた。
- 57 10年ほど前、日本の某地域の社会学者グループが中国北京の北京師範大学を学術交流で訪問した際、同大学の大学院に当時留学していた私の学生が通訳を買って出た。その折、日本側代表団は北京師範大学の社会学者たちに社会学の基礎レベルの話初学者に話して聞かせるといった態度で「講義」し、北京師範大学側の失笑を買った。私の学生の話では、日本の学者はこの失笑の意味が皆目分らない様子だったという。
- 58 既述のように元来、文革期の中国研究には毛沢東指導下の中国から「学ぶに足る」ものが多くあると見なす観点があった。典型的な議論としては、山田慶児『未来への問い——中国の試み』筑摩書房、1968年、同『混沌の海へ』筑摩書房、1975年。中国研究以外の分野でも、たとえばスリランカ研究の中村尚司『豊かなアジア、貧しい日本』

学陽書房は、エコロジストの立場から日本がアジアの智慧に学ぶべきだとする観点に学ぶべきとする議論をしている。

- 59 山内一男『中国社会主義経済研究序説』法政大学出版局、1971年、とくにその第五章、第六章、補章を参照。
- 60 むろん中国問題を専門に研究する学界には「検証」能力があるとする反論もあり得よう。しかし学界内部の相互「検証」は、学術面での創見や貢献をめぐる論争的観点にとどまるものであって、研究の目的論や研究成果の社会的利害得失をめぐる利害関係者が求める「検証」とはおのずと異なるものである。
- 61 Francis Fukuyama, *The End of History?*, *The National Interest*, 16 (Summer 1989).
- 62 Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilization?*, *Foreign Affairs* (Summer 1993).
- 63 Barry Buzan, *People, States, Fear*, 2nd edition, London: Harvester Wheatsheaf, 1991, pp. 175–177. および Stephen D. Krasner (ed.), *International Regimes*, Cornell University Press, 1983.